

出荷内容から見た中海本庄工区内における 魚介類の生息状況

越川敏樹¹

A study of fish of Honjou area in Lake Nakaumi -Data analysis of wholesale of fish-

Toshiki Koshikawa¹

Abstract: Present status of fish inhabit Honjou area in Lake Nakaumi was analyzed by using the record of payment slip of a fish dealer. During a year from 1 November 1997 to 31 October 1998, two distinct periods were found in a condition of trade; one with good trade from mid-July to early January and the other with poor trade from mid-January to early July. Fishes with large amount in trade were *Acanthogobius flavimanus*, *Chaenogobius annularis*, *C. heptacanthus*, *Konosirus punctatus*, *Harengula zunasi* and *Lateolabrax japonicus*.

Key words: good and poor fish trade, Honjou area, migration

はじめに

本庄工区内の魚類については、これまでに小型定置網(ます網)の漁獲による確認をもとに、棲息魚種をまとめたものがある(1997, 越川)。そこでは、棲息魚種のリストの他に、種ごとの量・出現時期・商業的な価値などなどがひととおり述べられているが、その主な根拠は、当地の鮮魚商と専門漁師からの聞き込みであり、その点おおづかみな内容に留まっている。

今回の報文は、その点の不足を補う意味で、地元の漁師から鮮魚商に引き取られた記録をもとに、本庄工区内における魚介類の出現状況を詳しく調べてみた(表1)。

この作業によって、本庄工区内における主に北岸側の年間の漁獲量、種類構成、種ごとの出現状況などの細かな変化を捉えることができた。

調査方法

1997年11月1日から1998年10月31日までの期間に、本庄町の一鮮魚商によって引き取られた魚介類のうち、本庄工区内の北岸側に張られた小型定置網および小型手繰網によって漁獲されたものの記録を整理して資料として使用した(図1)。今回の場合は、本庄町の4軒の漁家が該当する。

上の期間において、実際に魚介類の取引が行われたのは、330日であった。今回は、330日をおよそ10日間隔で束ねて34の分節に分け、漁獲内容の変化および傾向を調べた。

今回の漁獲方法の主体は小型定置網であり、これまでの調査では、中海における棲息魚種のほとんどが入ることから、本調査によっても本庄工区内におけるおよその魚介類の棲息状況を反映しているといえる。また、漁獲された魚介類は、一部の不用なものを除き、分別して問屋に卸されるので、主要な魚介類

¹ 島根野生生物研究会
Shimane wildlife Society

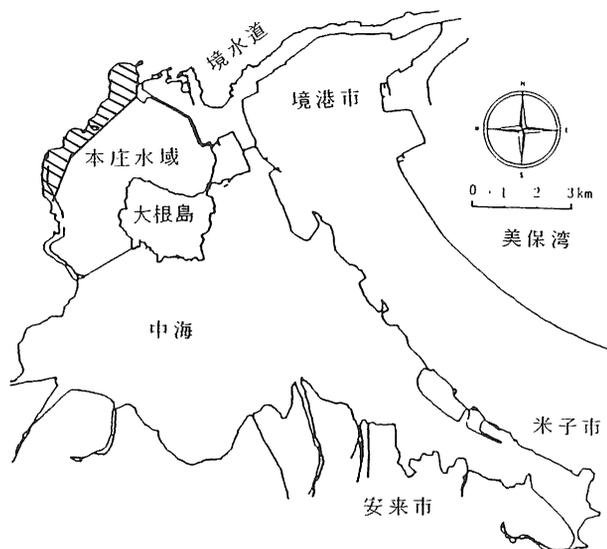


図1. 本庄水域と定置網の設置水域 (斜線部分).

の漁獲内容と大きな差はない。

ただ、出漁は天候に左右されない限り毎日行われるが、不漁時は漁を見合わせる場合があり、逆に豊漁時には同日に二度の漁をすることもあるので、豊漁と不漁時における漁獲量の差は、いっそう開く場合があることを考慮する必要がある。

また、今回は、当地で主要な魚介であるイサザアミ (オダ) の取引量の把握が不十分であったので、他と同一の資料として取り扱えなかったことを断っておく。

結果と考察

(1) 漁獲量と優占魚種の変化等

①量的な変化

今回の調査においては、表2に示されるとおり、7月中旬から1月初旬までと1月中旬から7月初旬までの期間 (1997・1998年) で、取引量に顕著な差が見られた。前者の取引量は多少の例外はあるが、1日平均50～140kgであるのに対して、後者は一桁台～40kg以下であった。

以下、便宜上漁獲量の多い前者を「多獲期」とし、量的に少ない後者を「少獲期」として分ける。

それらは、全体の34の分節のうち、「多獲期」は18分節で、「少獲期」は15分節となった。

「多獲期」において、平均100kg/日を超える分節は9回あった。その際、すべて特定な一魚種が飛び抜けて多く漁獲されている。因みに、9回のうちマハゼが5回で、メゴズ (ピリングとニクハゼ) が3回であった。特に12月初旬から1月初旬にかけては、平均

100kg/日の分節が4回連続 (39日間) しており、総重量の9割以上がマハゼで占められていた。このことは、この時期に本庄工区内にマハゼが集中することがうかがえる。また、多くの個体の生殖巣が成熟もしくは完熟の状態であることから、本庄工区内に産卵のために集まっていることが推察される。漁獲量の面から、マハゼに続くものは、サツパであるが、上の2種のように総量に対して独占的な程度に漁獲されることはない。その他は、マアジ・ウロハゼ・スズキ・ヨシエビが量的にまとまって漁獲されることがあった (表2)。

「少獲期」では、4月にコノシロが総漁獲量に対して大きな割合を占めている他は、マハゼ・メゴズ・サツパがそれに続くものであった。「多獲期」には出現しなかったものに、ゴリ (主にシマハゼとチチブ) とクロソイがややまとまって漁獲された。更に、漁獲量のそもそも少ない「少獲期」において、1月中旬から3月中旬の5分節 (約2ヶ月間) は1日平均5.4～19.9kgと極端に少ない期間であった。その漁獲の全体量が極少ない期間において、マハゼのみが独占的な分節が4回 (35日間) あった。しかも、この期のマハゼはすでに産卵期の過ぎたものも多く、著しくやせた個体も多い。よって、この時期は本水域において漁獲される魚介類が最も少ないと同時に、市場価値の低い内容である。

3月下旬になると、コノシロとサツパが漁獲され総量がやや増えるが、平均10～20kg/日程度に増加するにすぎない。また、この時期は、マハゼが優占種から外れるが、それは、産卵後の成魚がすでに死亡し、小数の産卵に参加していない個体群しか残っていないためである。やがて、5月下旬になると、深場から岸よりの浅瀬に移ってきた当年生まれの幼魚が漁獲されるようになる。

②出現種類数

漁獲内容で平均10種/日以上魚介類が見られたのは、34の分節のうち9回あり、いずれも7月中旬から10月下旬の間に見られた。その際の平均は11.2種/日であり、最高は8月下旬の分節で平均13.0種/日であった。逆に、12月中旬から3月初旬にかけては、平均2.8種/日であり、最低は、1月中旬の分節で平均2.3種/日であった。

このことから、調査年では本庄工区における生息魚種数は、夏から秋にかけて最高になり、冬から春にかけて最低となっていた。この傾向は、例年同様な状況にあり、中海本体においてもほぼ同じであると推察される。

表1. 本庄水域の魚介類相と商取引された魚介類. ★印 (1997年11月1日～1998年10月).

(科)	学名	和名		
(やつめうなぎ科)	<i>Entrosphenus japonicus</i>	カワヤツメ	<i>Gerres oyena</i>	クロサギ
(あかえい科)	★ <i>Dasyatis akajei</i>	アカエイ	(いそぎんぼ科)	
(このしろ科)	★ <i>Konosirus punctatus</i>	コノシロ	<i>Istiblennius enosimae</i>	カエルウオ
(にしん科)	<i>Sardinops melanosticta</i>	マイワシ	(にしきぎんぼ科)	
★ <i>Harengula zunasi</i>	サツバ		<i>Ernogrammus exagrammus</i>	ムスジガジ
★ <i>Engraurus japonica</i>	カタクチイワシ		<i>Enedrias nebulosus</i>	ギンボ
(さけ科)	<i>Oncorhynchus keta</i>	サケ	<i>Dictyosoma burgeri</i>	ダイナンギンボ
<i>Onkorhynchus masou</i>	マス		(はぜ科)	
(あゆ科)	★ <i>Plecoglossus altiveris</i>	アユ	★ <i>Tridentiger obscurus</i>	チチブ
★ <i>Hypomesus olidus</i>	ワカサギ		★ <i>Tridentiger trigonoc-</i>	
(しらうお科)	★ <i>Salanx microdon</i>	シラウオ	- <i>ephalus</i>	シマハゼ
★ <i>Tribolodon hakonensis</i>	ウグイ		<i>Gobius pflaumi</i>	スジハゼ
<i>Carassius carassius</i>	フナ		★ <i>Acanthogobius flavimanus</i>	マハゼ
<i>Cyprinus carpio</i>	コイ		★ <i>Glossogobius giuris</i>	ウロハゼ
(ごんずい科)	<i>Plotosus anguillar</i>	ゴンズイ	<i>Chaenogobius sp.</i>	スミウキゴリ
(うなぎ科)	★ <i>Anguilla japonica</i>	ウナギ	<i>Chaenogobius urotaenia</i>	ウキゴリ
(いかなご科)	<i>Ammodytes personatus</i>	イカナゴ	★ <i>Chaenogobius annularis</i>	ピリンゴ
(だつ科)	<i>Ablennes anastomella</i>	ダツ	★ <i>Chaenogobius heptacanthus</i>	ニクハゼ
(さより科)	<i>Hemiramphus kurumeus</i>	クルマサヨリ	<i>Chasmichtys dolichognathus</i>	ドロメ
★ <i>Hemiramphus sajori</i>	サヨリ		<i>Gobius abei</i>	アベハゼ
(とげうお科)	<i>Gasterosteus aculeatus</i>	イトヨ	<i>Gobius gymnauchen</i>	ヒメハゼ
(ようじうお科)	<i>Syngnathus schlegeli</i>	ヨウジウオ	<i>Luciogobius guttatus</i>	ミミズハゼ
<i>Hippocampus coronatus</i>	タツノオトシゴ		<i>Leucopsarion petersi</i>	シロウオ
(とうごろういわし科)	<i>Atherina bleekeri</i>	トウゴロウイワシ	(まぶく科)	
(ぼら科)	<i>Liza affinis</i>	セスジボラ	<i>Fugu niphobles</i>	クサフグ
<i>Liza haematocheila</i>	メナダ		★ <i>Fugu rubripes</i>	トラフグ
★ <i>Mugil cephalus</i>	マボラ		★ <i>Fugu parudalis</i>	ヒガンフグ
(かます科)	★ <i>Sphyaena schlegeli</i>	アカカマス	(はこぶく科)	
(たちうお科)	<i>Trichiurus lepturus</i>	タチウオ	<i>Ostracion tuberculatus</i>	ハコフグ
(あじ科)	★ <i>Trachurus japonicus</i>	マアジ	(かさご科)	
(ひいらぎ科)	★ <i>Leiognathus nuchalis</i>	ヒイラギ	<i>Sebastes oblongus</i>	タケノコメバル
(てんじくだい科)	<i>Apogon lineatus</i>	テンジクダイ	★ <i>Sebastes schlegeli</i>	クロソイ
(すずき科)	★ <i>Lateolabrax japonicus</i>	スズキ	(ごち科)	
<i>Lateolabrax latius</i>	ヒラスズキ		★ <i>Platycephalus indicus</i>	マゴチ
(きす科)	★ <i>Sillago paruvismquamis</i>	キス	(ほうぼう科)	
(いしだい科)	★ <i>Oplegnathus fasciatus</i>	イシダイ	<i>Chelidonichthys kumu</i>	ホウボウ
(めじな科)	<i>Girella punctata</i>	メジナ	(ひらめ科)	
(うみたなご科)	★ <i>Ditrema temmincki</i>	ウミタナゴ	★ <i>Paralichthys olivaceus</i>	ヒラメ
★ <i>Mylio macrocephalus</i>	クロダイ		(かれい科)	
★ <i>Rhabdosargus sarba</i>	ヘダイ		<i>Limanda yokohamae</i>	マコガレイ
<i>Chrysophrys major</i>	マダイ		★ <i>Kareius bicoloratus</i>	イシガレイ
(しまいさき科)	★ <i>Therapon oxyrhynchus</i>	シマイサキ	-----	-----
(くろさぎ科)			～甲殻類～	
			(いかむり科)	
			<i>Petalomera wilsoni</i>	ワタゲカムリ
			(こぶしがに科)	
			<i>Philyra pisum</i>	マメコブシガニ
			(わたりがに科)	
			★ <i>Portunus pelagicus</i>	タイワンガザミ
			★ <i>Portunus trituberculatus</i>	ガザミ
			(いわがに科)	
			★ <i>Eriocheir japonicus</i>	モクズガニ
			<i>Hemigrapsus penicillatus</i>	ケフサイソガニ
			<i>Sesarma dehaani</i>	クロベンケイ
			(やどかり科)	
			<i>Pagurus samuelis</i>	ホンヤドカリ
			(てなえび科)	
			★ <i>Palaemon serrifer</i>	スジエビモドキ
			★ <i>Palaemon orientis</i>	シラタエビ
			<i>Macrobrachium nipponense</i>	テナガエビ
			(くるまえび科)	
			★ <i>Metapenaeus monoceros</i>	ヨシエビ
			★ <i>Penaeus semisulcatus</i>	クマエビ
			★ <i>Penaeus japonicus</i>	クルマエビ
			(てっぼうえび科)	
			<i>Alpheus sp.</i>	テッポウエビ類
			(あみ科)	
			★ <i>Neomyisis sp.</i>	イサザアミ類
			<i>Neomyisis japonica</i>	ニホンアミ

表2. 本庄工区内における本庄町漁家の出荷状況 (1997年11月1日～1998年10月31日)(小型定置網及び小型手繰網による).

期 間 (日数)	平均総重量 (kg/日)	平均種数	多 獲 魚 介 類 <◆数占的、◇個占的>			海産種数
			1位	2位	3位	
11月 01～10 (10)	123.4	8.7	◆マハゼ	◇メゴズ	ヨシエビ	5
11月 11～20 (10)	66.5	7.0	◆マハゼ	◇メゴズ	スズキ	2
11月 21～30 (10)	38.8	6.2	◆マハゼ	◇メゴズ	スズキ	1
12月 12～11 (10)	215.1	4.3	◆マハゼ	スズキ		3
12月 12～20 (9)	140.6	3.5	◆マハゼ			4
12月 21～29 (9)	121.5	3.0	◆マハゼ			2
1月 05～15 (11)	102.6	2.6	◆マハゼ			4
1月 16～30 (11)	19.9	2.3	◆マハゼ			2
2月 02～16 (9)	5.4	2.5	◆マハゼ			2
2月 17～28 (7)	8.2	3.1	◆マハゼ	フグ類		2
3月 02～13 (8)	7.4	2.9	◆マハゼ			1
3月 14～23 (8)	13.9	4.5	マハゼ	スズキ	クロソイ	3
3月 24～30 (7)	27.6	6.4	◇コノシロ	スズキ	マハゼ・クロソイ	3
4月 01～10 (10)	34.0	7.1	◆コノシロ	クロソイ	マハゼ・スズキ	4
4月 11～20 (10)	56.9	8.5	◆コノシロ	スズキ	サッパ	4
4月 21～30 (10)	34.1	7.1	◇コノシロ	サッパ		4
5月 01～11 (10)	27.8	8.5	◇サッパ	◇ゴリ※2		3
5月 12～21 (10)	23.9	8.3	◇サッパ	◇コノシロ	メゴズ・サッパ	1
5月 22～31 (10)	20.8	7.7	◇サッパ	◇メゴズ		2
6月 01～10 (10)	18.4	7.7	◆メゴズ※1	◇サッパ		1
6月 11～20 (10)	14.4	7.2	◆メゴズ	◇サッパ		2
6月 21～30 (10)	27.8	9.1	◆メゴズ	◇サッパ	マハゼ(幼)	3
7月 01～11 (10)	38.6	9.6	◇メゴズ	◇サッパ	マハゼ(幼)	3
7月 12～21 (10)	56.9	12.8	◇サッパ	◇メゴズ	マアジ	9
7月 22～31 (10)	88.1	12.8	◇メゴズ	◇サッパ	マアジ	8
8月 01～10 (10)	128.4	10.9	◆メゴズ	マハゼ	サッパ・ヨシエビ	7
8月 11～20 (10)	65.4	7.3	◇メゴズ	サッパ	マハゼ・マアジ	6
8月 21～31 (11)	128.6	13.0	◆メゴズ	◇マハゼ	サッパ・マアジ	6
9月 01～10 (10)	64.1	11.8	◇メゴズ	◇サッパ	マハゼ	6
9月 11～20 (10)	58.1	9.4	◇マハゼ	サッパ	ウロハゼ	3
9月 21～30 (10)	36.1	11.1	◇サッパ	マハゼ	メゴズ	6
10月 01～10 (10)	60.7	11.6	◆マハゼ	サッパ		7
10月 11～20 (10)	47.0	10.4	◆マハゼ	サッパ	メゴズ・マアジ	7
10月 21～31 (10)	94.6	11.8	◆マハゼ	マアジ	サッパ	5

※1 ビリンゴとニクハゼ

※主としてチチブとシマハゼで時に小型のハゼが混じる

*表4の海産魚

表3. 汽水性魚類の出荷状況 (1997年11月1日～1998年10月31日). +++ 分節中全回出現, ++ 半数以上出現, + 数回出現, ・ 1回出現.

時期	種	ワカギ	アユ	サバ	コノシ	ウギ	ササ	スズ	カサ	サ *1	サ *2	マサ	カサ	ヨシ	モサ
11/01				+++		+++	++	+++	+	++	+++	+++		+++	・
11			・	++		++	・	+++	++		+++	+++		+++	・
21				+		+	・	+++	+		+++	+++		+++	・
12/01						+	・	+++			+	+++		・	
11						・		+++	+			+++			・
21								+	+		+	+++			・
1/01						・		・	+			+++			
11						・		・			++	+++			・
20								・			・	++			・
2/01											+	+++			・
10											+	+++			
20						・		・			+	+++			・
3/01						・		++				++			
11						+		+++	++	+		+++			・
21					++	+		+++		+++	+	+++			+
4/01		+	+	+++	++			+++	+++	+++		+++			・
11		++	++	+++	++	+		+++	+++	+++		+++			・
21		+++	++	++	+	+		+++	+	+++		++			
5/01		++	+++	+	++	+		+++	+++	+++		++			
11		++	+++	++	++	+		++	+++	+++	++	++			
21		+	+++	+	++			+++	・	+++	+++	++			
6/01		・	++	+++	++	++		+	+	+++	+++	++		・	
11	+		++	+	++			++	+	+++	+++	+++	+	+	
21	+++	+	+++		++					+++	+++	+++	+	++	
7/01	++	・	+++		+++			++		+++	+++	+++	++	+++	
11	++	+	+++		+++	・	+	+	+	+++	+++	+++	+++	+++	
21	+++	・	+++		++	+	++	++	++	+++	+++	+++	+++	+++	
8/01	++	+	+++		++	・	++	++	++	+++	+++	+++	+	+++	
11	・		+++		+	・	+	++	+	++	+++	+	+++		
21			+++		+++	+	+++	++	++	++	+++	+++	++	+++	
9/01		+	+++		+++	・	+++	+++	++	+++	+++	+++	++	+++	
11		+	++		++	+	+++	++	+	+++	+++	+++	++	++	
21		・			++	++	+++	+++	++	+++	+++	+++	++	++	+
10/01			+++		++	++	+++	+++		+++	+++	+++	+++	+++	+
11	+	・	+++		+	+++	+++	+++		++	+++	+++	+++	+	
21	+		+++		+++	+++	+++	++		+++	+++	++	++		
30	+		+++		+++	+++	+++	++		+++	+++	++	++	+	

* 1～主としてチチブとシマハゼで時に他の小型のハゼが混じる * 2～ピリゴとニクハゼ

表4. 海産魚の出現状況 (1997年11月1日～1998年10月31日). +++～期間中全出現回数.

期 / 種	アカイ	マアジ	ウミタナゴ	シマイササギ	カササギ	ヘタイ	イシダイ	キス	ヒラメ	カササギ*1	トサブリ	フグ類*2	クルマエビ	ワカサギ
11/01										+	++	+	++	+
10									++				+	
20									+					
12/01									+		+++		++	
10									+	+	+++++			+
20										+	++++			
1/01									+	++	++	++		
16										++	+			
2/01										+++	++			
16										++		++		
3/01												++		
14					+					++	+			
24					+					++		+		
4/01	+			+						++	++			
11			+++		++					+++++	++			
20				+					++	+++	++++			
5/01				+						+++++	++			
12										++				
22					+						++			
6/01													++	
11										+			++	
21	++						++++						+	
7/01		+					++						+	
12	+++	+++++	++++				+	+			+		+	++
22	+++	+++++	+++				++++	+		+	+		++	+++++
8/01	+	+++++	+		+		+++			++				+++++
11	++	+++++		+			++			++				+++
21	+++	+++++	++	++++						+++				++++
9/01	+	+++++					+	+		++				++++
10	++++	++++												+
20	+++++	+++++	+				+							+++
10/01	+++++	+++++		+		+	+				++			++
11	+	+++++	++				++++			++	++			
21	+	+++++					++++		+		+++			

*1～主にイシガレイ、*2～サバフグ・ヒガンフグなど

(2) 汽水性魚類の出現状況

本庄工区は、中海本体とほぼ同じ程度の塩分濃度の汽水であることから、魚介類の総生息量の大部分を汽水性魚類が占めている(表3)。汽水性魚類の定義ははなはだあいまいであるが、ここでは年間のうち半分以上の期間を汽水域で生活する魚介類とした。

表2より、主な汽水性魚類は、4月初旬から11月下旬までが種類数とともに出現頻度が高く、逆に12月上旬から3月下旬までは低い。

周年にわたって出現する種は、マハゼであり、そのときどきの量的な変動は大きいもののほとんど毎回漁獲されている。ただ、前述したように4月下旬から5月下旬にかけては、産卵後の成魚が死亡により激減すると同時に、当年生まれの幼魚との交替までの境界期にあたり、時には全く漁獲のない日もあった。また、最低水温期の1月と2月には、漁獲される魚種が極めて少なくなるが、ウナギ・スズキ(セイゴ)・クロソイがわずかながらも漁獲された。このことから、上の3種は最低水温となる2月を除いて、ほぼ年間を通して活動していることがうかがえる。メゴズ(ピリンゴとニクハゼ)は希な時期は3・4月とずれるが、ほぼ年間を通して漁獲されていた。その他は、4月上旬より漁獲され始めるものが多い。それらは、サッパ・コノシロ・アユ・サヨリ・ゴリ(主にチチブとシマハゼ)であり、このうちサッパは11月下旬まで長く漁獲が続く。これに近い傾向は、アユとサヨリである。コノシロは、4月から6月まで漁獲されている。6月上旬から、ワカサギ・ウロハゼ・ヨシエビが漁獲されている。前2者は、10月下旬まで見られるが、ヨシエビは11月下旬まで長く漁獲されている。モクズガニは、出現頻度は低いですが、9月下旬から冬季を経て4月中旬まで長く漁獲されている。

(3) 海産魚の出現状況

①海産魚の種類数

ここにおける海産魚の定義は、普段は美保湾や近海に生息している魚介類の中で、数カ月間汽水の中海に進入してくるものとした。もっとも、一部は本水域の深みで越冬するものもあるようである。表4はそれぞれの分節に漁獲された種類数を表している。最も多く見られた期間は、7月中旬から10月下旬にかけてであり、その間11の分節があり、平均5.4種/日であった。これは、前述した全魚介類の出現種の多かった期間と全く重なっている。つまり、上の期間は全体の種類数が多いと同時に、海産魚の量も多い。このことは、「多獲期」においては、全体の種類数は海産魚

の多さによって決定していることを示している。

しかし、「少獲期」においては、1月中旬から3月下旬までの最も漁獲の少ない期間とそれ以後のやや増加した時期とを比較してみると必ずしも「多獲期」のように明確な特徴がない。つまり、最低漁獲期(5分節)の全体の種類数が平均3.6種/日で、海産魚の平均が2.1種/日なのに対して、それ以外(10分節)では、全体が平均8.1/日で海産は平均2.7種であり、全体の種類数の増加の割に海産魚の増加は伴っていなかった。このことは、本庄工区では、全体の種類数に占める海産魚の割合が、「多獲期」と「少獲期」では根本的に異なっていることを示している。

②海産魚の出現の仕方

海産魚の場合、11月初旬から5月中旬までとそれ以降の5月下旬から10月下旬までに2通りの出現傾向が見られる。

前者は、水温が低下する時期に始まり、初夏までで、ヒラメ・カレイ類・トラフグ・その他のフグ類が多く漁獲されている。後者は高温期にあたり、アカエイ・マアジ・ウミタナゴ・イシダイ・ワタリガニ類など多くが出現する。特に、マアジは7月から10月にかけては、出現頻度のみならず数量的にも多く、しばし優占種にもなっている。これらの海産魚は、11月から3月までの低水温期には全く見られないことから、その期間は水温の高い外海に出ているものと思われる。また、海産魚が低水温を避けて、外海に出る時期は汽水性魚類よりもおよそ1ヶ月程度早かった。

それに対して、低水温期に多く出現するカレイ類(主にイシガレイ)とトラフグは、高温期にも漁獲されているので、年間を通じて本庄工区に生息している。その場合、同一個体なのか順次回遊しているのか現時点では分からない。

また、クルマエビは、6・7月と11月の2度の期間に漁獲されている。

摘 要

- ① 今回の調査では、7月中旬から1月初旬までと1月中旬から7月初旬までの期間では、漁獲量に顕著な差が見られた。前者が多く、後者は少なかった。
- ② 1日平均100kg以上は9分節(1分節は約10日)あり、マハゼとメゴズが独占し、それぞれ5回と3回であった。
- ③ マハゼとメゴズ以外で量的に優占する種は、サッパ、マアジ、スズキ、ウロハゼ、ヨシエビ、コノシロであった。

- ④出現種数は、7月中旬から10月下旬にかけて特に多く、1日平均11.2種であった。それに対して、12月中旬から3月にかけては平均2.8種と特に少なかった。
- ⑤汽水性魚類の出現頻度は、4月初旬から11月下旬まで高く、12月上旬から3月までが低かった。
- ⑥多くの汽水性魚類は、4月上旬より漁獲され、主なものは、サツパ、コノシロ、アユ、サヨリ、ゴリ（主にシモフリシマハゼとチチブ）であった。また、ウロハゼ、ヨシエビ、ワカサギは6月上旬から漁獲された。
- ⑦海産魚は、7月中旬から10月下旬にかけて多く出現した。主なものは、アカエイ、マアジ、ウミタナゴ、イシダイなどであった。
- ⑧海産魚では、低水温期に多く出現する種も見られた。主なものは、ヒラメ、トラフグ、カレイ類（主にイシガレイ）であった。
- ⑨多くの海産魚が、低水温を避けて外海に出る時期は、汽水性魚介類より約1ヶ月早かった。また、逆に本水域に進入する場合は、約1ヶ月遅かった。

お わ り に

今回の調査によって、1997年11月から1998年10月までの本庄工区内における魚介類の出現状況を細かく捉えることができた。この調査結果をもってして、ただちに本水域の模式的なものとするのは早計

であるが、この調査に先だって、近年の漁獲状況をしらべてみると、今回の調査期間は魚類相や漁獲量に関する限りは特に際立った特色はなかった。（越川、発表予定）よって、本調査は本水域の魚介類の生息状況において標準的な面を多く含んでいると思われる。

今後は、同時期の隣接する中海本体の魚介類の生息状況や異なる年の同様な調査をすることによって、本水域の魚介類の特性をより明確にできるものと思われる。

最後になったが、このレポートを作成するにあたって、島根医科大学生物学教室 坂本 巖助教授並びに、島根大学汽水域研究センター 國井秀伸助教授には、全体にわたってご指導をいただいた。また、資料の提供並びに分類整理にあたって、本庄町鮮魚商の三代 富代氏に多大なご協力いただいた。更に、同鮮魚商の三代 裕司・重之氏には、本水域の魚介類に関する貴重な情報をいただいた。紙面を借りて心からお礼を申し述べたい。

引 用 文 献

- 越川敏樹 (1997) 中海本庄水域の魚類. LAGUNA (汽水域研究), 4: 19 ~ 27.